



「優秀なる商品必ず勝つ」の 信念の元、 物づくりにかける職人魂

綿谷 奈良吉 (1869~1947年)



株式会社 呉竹

本社所在地：奈良市南京終町7丁目576 従業員数：270名 資本金：7,053万円
創業：1902(明治35)年10月1日
事業内容：墨、書道用品、水墨画用品、絵手紙・水彩スケッチ用品、筆ペン、マーキングペン、
カリグラフイマーカー、店頭サイン用品、スクラップブック用品の製造、販売および輸出入

奈良墨とその歴史

墨 が我が国にもたらされたのは、西暦610年、推古天皇18年のことで、「日本書紀」に「高麗の僧、曇徴が墨の製法を日本に伝えた」と記されている。その後、墨は各地で造られたが、室町時代に入り、奈良興福寺の二諦坊の燈明の煤を集めて造った「油煙墨」は「黒みが強く光沢がある」と奈良墨の名声が高まった。それ以来奈良の伝統産業として今日まで継続し、そのシェアは95%を誇り、日本の墨はすなわち奈良墨と言われるようになった。

創業に至るまで

創 業者である綿谷奈良吉は、1869(明治2)年9月3日に奈良で生まれた。農業をする傍ら、製墨業大手の玉翠堂に製墨職人として、ごく早い時期に奉公に出た。墨造りは冬場にしか行われぬ季節産業であるため、農閑期に墨職人として職を求めたようだ。

墨造りのポイントは今も昔も変わらず、植物油から採集した煤と、それを固める役目の膠との混合物で温かいうちに、足揉みし、手揉みして彫刻した木型に入れ、成型する作業である。製墨の工程で必要とされるのは、職人としての勘と独自の手技の発揮、墨の仕上がりを左右する精練を充分に行うことができる体力である。奈良吉はそのいずれにも秀でたものを持っていたと思われ、名墨匠としての声価を高めていった。製墨技術に優れ、同時に研究熱心であった奈良吉は間もなく玉翠堂の職長にまで登りつめた。

奈良吉の独立 ～綿谷商会の創業へ～

玉 翠堂で筆頭の地位にあって、優れた墨を造る奈良吉は、日が経つにつれ独自の自分だけの墨を造りたいと思うようになった。そしてある日ついに、独立したい旨を当主に伝えた。しかし、当主からはなかなか許しをもらえなかったようである。それは無理のないことで、名墨匠といわれ、店を代表するような良墨佳墨を造る墨職人を失うことは、それまで築き上げてきた製品全体への信頼をも同時に手放すに等しいことだからである。玉翠堂としてはなんとしても奈良吉を引き留めたかったに違いない。しかし、奈良吉の独立への思いは揺らぐことはなく、ついに玉翠堂当主に了解を得て1902(明治35)年10月1日「綿谷商会」を創業した。これが現在の「株式会社呉竹」へと続く原点である。この時、奈良吉は33歳になったばかりで、製墨職人としてはこれからまさに脂の乗る時期だった。



墨造りに使用される彫刻が施された木型

製墨職人の日常生活

国 家による習字教育の奨励に支えられるようにして、奈良での製墨の生産量は順調に伸びた。製墨に従事する業者の数が増え、その中に綿谷商会もあった。当時綿谷商会を興したばかりの奈良吉の1日は早朝3時に起床、その日に生産する材料の調合に始まる。まずは膠を湯煎で溶かし煤と香料とを混ぜ合わせる。そして、自分の最も得意分野である型入れの工程を「優秀なる商品必ず勝つ」を信念に商品を造り続けた。しかし個人商店として独立したため、後工程も自らの手で作業しなければならなかった。特に大変なのは「灰替え」と言う乾燥工程でできたての柔らかい墨を、毎日毎日、灰の中に埋め替えて乾燥することである。その後水洗い、水分をとってから表面を貝殻で磨いて光沢をつける。文字や模様を彩色して仕上げとなる。このようにして一挺の墨を造り上げるのだが、これに60日、長くて半年の期間を要し、毎日が疲労困憊の状態が続いた。

独立後の状況

半 年近く資金を寝かせながらでき上がった墨、しかし新規の業者が市場に進出するのは容易ではなかった。名人と言われる墨匠がいても、大手の下請けで細々と生産を続け信用を積み重ねなければならず、残念ながら自社ブランドではほとんど販売できなかった。



職人たちによる墨作りの様子

奈良吉には4男2女があったが、少しずつ仕事が順調になるに従い、家業の手伝いをさせた。長男楠太郎は会社設立時に社長に就任し、奈良吉の夢である自社ブランドでの販売を2人して考え抜き、従来の販売方針の転換を図った。

販売ルート開拓の苦悩

綿 谷商会も下請けの存在を脱して、全国市場に進出し家業自立の道を探るため、何よりも有力な文具ルートに製品を乗せなければならなかった。全国各地の間屋に墨を売り込むため商売に回ったが、創業から20年にも満たない新参で、しかも弱小の墨屋の売り込みに耳を貸そうとすることは無かった。その頃、奈良吉は自分の造った墨に絶対的自信を持っており、発想の転換をして、一番消費してくれている書道教育の指導教師に直接良さを知ってもらい、選定墨として推奨してもらおうと考えた。当時としては全く新しいアプローチであり、営業スタイルであった。奈良吉の子どもたちが、学校に硯2面と筆2本を持参し、書道教育の指導教師に従来使用の墨と自社の墨を同じ条件で使用し、比較してもらうことにした。そうして「選定墨」に推奨され、自力で販売ルートを切り開くこととなった。後年「優秀なる商品必ず勝つ」というスローガンが企業理念として掲げられるようになるが、それはこの時の経験が生かされたものだった。



「くれ竹」の墨が「選定墨」に推奨された

「くれ竹」 墨の誕生

大正時代後期、埼玉県立熊谷高等女学校を訪問し、「選定墨」推奨を依頼したところ、同校が発行している校内誌「くれ竹」を見つけ、その風雅で上品な響き、美しい語感に魅力を感じ、墨の名称に使われるようになった。ちなみにこの題号は明治天皇の御製である「芽生えより直ぐなる心呉竹の伸びよ育め己が心を」に由来する。これ以後、各学校の推奨を受け順調に売上を伸ばし、業績も安定軌道に入ったことから、1924(大正13)年個人商店である綿谷商会の形態を改め精昇堂商会となった。なお社名はその後1953(昭和28)年に株式会社呉竹精昇堂、2003(平成15)年株式会社呉竹となり現在に至る。



同社が開発し市場を席卷した「墨滴」



大ヒット商品「筆ペン」(左図)
現在まで改善が続けられている (右図)

世相混乱期の製墨業

1931(昭和6)年満州事変をきっかけに太平洋戦争が始まった。終戦後GHQは「道」という言葉を含む授業は日本精神を涵養するとして全面禁止した。書道もその一つで学校教育において大きな市場を失った。そんな状況の中、創業者である綿谷奈良吉が1947年10月29日78歳で亡くなった。「墨を造らせたなら奈良が一番」と言われた職人気質と柔軟な発想による販路拡大など、創業者にふさわしい機知に富んだ人生であった。

受け継がれた創業者魂

呉竹は今年創業114年を迎える。綿谷奈良吉がメーカーの第一条件としてもものづくりの大切さを示し、それが現在の品質方針として「品質第一主義に徹し、お客様のニーズを満たす『安全で安心して使え、愛着の持てる商品』」を提供し、より良い社会に貢献する」としている。

また何事にもチャレンジ精神で臨む新しい発想が脈々と受け継がれた。墨造りから始まった呉竹が、市場のニーズに答え業界初の書道専用液「墨滴」を開発、発売し書道の授業のあり方まで変えた。また「書く」という事業領域で筆記具の生産に着手し、サインペン、筆ペンの開発で市場規模を拡大するとともに業界での地位を築き上げた。

奈良吉が書道教育の現場で書道教師の声を聞くのと同じように、新商品開発には常にお客様がいて、そのニーズを反映していくことが重要である。ものづくりへの情熱と柔軟な発想を持って社会に貢献し続けるという奈良吉の想いは、創業から現在に至るまで大切に受け継がれている。



現在取り扱っている商品の一部
「書く」ということを軸に幅広いラインナップをもつ